

## 平成18年度学力向上推進に関する合同研究発表会基調講演の概要

テーマ：「学校力・教師力の向上を目指して ―学習指導要領の改訂を踏まえて―」

### 1 学力をどうとらえるか

学力は一面からとらえてはいけない。ゆとり教育で一番下がったのが「関心・意欲・態度」である。80年代、90年代に、子どもに寄り添い、子どもを中心にしていこうということが空回りし、授業がおもしろくない、勉強の意味が分からないということになってしまった。勉強というのは苦しいところがある。その苦しさを子どもが自分自身の中で、しんどいけどやっぱりこれはやっとならないといけなと言いつけてやるのが勉強である。はじめからおもしろい授業を作らなければいけないことはない。あるところまでどうやっておもしろくするかである。

大村はま先生が繰り返しおっしゃられていたのが、「先生方が教えることを忘れてしまった。」ということ。子どもたちに意欲を持たせる、関心を持たせるためには、先生方からの働きかけが必要であるということ。今の教師は「これで話し合ってください」というように丸投げしてしまう。この学年段階でこの課題で、話し合いをするということはどういうことを先生が例示する。最初のうちは、上手に発言を引き出し、意見が同じところや違うところを組み合わせて、話し合いの形を先生が形成してあげる。何もなしで「話し合いをしてください。」では、がやがやで終わりである。発問もなくなった。考えると話し合うときには、問いが必要である。関心・意欲・態度だけでいいという学力はだめであるということが分かる。

2000年から基礎・基本の徹底が言われている。ドリルや反復練習が流行った。これも学力の一部ではあるが、一番大事な学力とは、自分の実感、納得を伴ってそれが自分の本音になることである。一点豪華主義はだめ。例えば豊富な体験があって、実感を持ち、その実感の世界が一人一人の中に形成されていく。そして「あっ、これは何だろう」という関心を強く持つようになり、「よし、やってみよう」という意欲につながり、自分で筋道を立てて考える力がついていく。そして、「これはこうじゃないか」という結論を出し、それを検証して知識にしていく。体験から始まり、関心・意欲になり、思考に行き、追求、探求になり、自分の結論を検証していく、そして本当に世の中に通用するような知識に持って行くことが必要。逆に、ある知識を得ることによって「えっ」と思う。今まで思っていたことと違うからそれについて調べてみる。追求・探求・考える。調べてみればみるほどおもしろいと関心が広まる、深まる。そしてもっと調べようと体験活動をする。体験や意欲・関心から、知識・理解に行く。そういう道筋があり、知識・理解から関心・意欲が喚起され、新たな行動ができる。そういう上向きの活動と下向きの活動、両方で本当の学力である。冰山というのは、見える部分は上の方だけである。見える部分は知識・理解・技能。しかし、冰山は水面下にもっと大きなものがある。これが、思考力であったり、問題解決力であったり、もっと下には、関心意欲であったり、もっとその下には体験があったりする。水面下から上に上がっていく、上から下に降りてくる動きの往復作用ができるようになるのが学力である。

2003年に「学びのすすめ」というアピールの中で「確かな学力」という言葉を使った。そして今度の指導要領の改訂も、土台にあるのは「確かな学力」というコンセプト。これは今、私が言ったことを指し示している。指導要領の4観点で言うと、関心・意欲、思考力や問題解決力、技能、知識・理解すべて大事、しかも大事な4観点が相互に絡み合っていないといけな。全部が関係していないといけな。これが今求められている学力のコンセプト。これが「確かな学力」である。これは50年先、100年先でもこういう学力でないといけな。

### 2 学習指導要領改訂の動き（国の流れ）

中教審教育課程部会、またその下の14の部会が今のところ日程も内容も不透明になっている。遅れた理由は、一つは教育基本法問題。そして、学校教育法を変えなければならないこと。学校教育法で大枠を決めて、学習指導要領の改訂という形になる。学習指導要領は学校教育法の施行規則の位置づけであるから、学校教育法があがらないと、指導要領について検討することができない。

もう一つは、今度の指導要領の改訂は難しいということ。過去2回の改訂のゆとり路線は小学校や中学校、高校の大切なものを切り捨てる方向に行った。これを算数・数学・理科では復活させる。また、カリキュラムは国際的に連動している。例えば、イギリスやアメリカで算数・数学、理科で何年生段階でどういうことをやっているということのをにらみながら考える必要がある。上海では小学校1年生が、李白や杜甫の漢詩を暗記していた。漢字とローマ字では、日本の小学校と比べて格段に差がある。国際的な比較の中ではカリキュラムが非常に遅れてしまった。5日制で6時間全部やっても30時間しかない。一度削ったものについて、どれをどういうように復活させるかということしんどいことである。

もう一つ、親部会も専門部会も、この2～3ヶ月、開店休業状態である。未履修の問題、いじめの問題、やらせの問題で忙殺され、親部会も専門部会も会議がもてない状態である。

変わることはないのは、指導要領は最低基準であるということ。指導要領に書いてあることは、どの子にも分かって、力がついてということ。この含みはなにかというと、それぞれの学校で、それぞれの先生が、プラスアルファをやっている、やっているとよりやるべきだと言うことである。今の教科書は、小・中・高とも、2001年の秋には検定要領が変わり、指導要領にないことを入れなければならなかった。発展的な教材として、小学校の一部の教科書が、国語の古典を入れているといったところである。理科を見れば一番分かる。教科書会社ごとに小学校の理科、中学校の理科、それぞれ違うものが入っている。しかしそれをどう使うか、それにプラスして自分の自主教材をどう入れるかが先生の仕事だということになる。この性格付けは変わらない。指導要領は最低基準である。各授業の中では、それ以上をやるのが当然である。もちろん指導要領は最低基準ですから、分からなければ補充指導しなければならない。

2番目に、国語の力、言葉の力を付けること。これも次の教育課程部会に引き継がれる大事な事項である。算数・数学でも教科書は日本語で書いてある。理科だって教科書は日本語である。問題構造を把握して、日本語できちんと答えられなければいけない。これが非常に重視される。国語でも、話す、聞く、書く、読むというのがあるが、今までコミュニケーション能力という観点から、話す・聞くが非常に強調された。もっと強調されなければいけないのは、まずきちんと読み取ること。その次はきちんと書けるということ。これが土台である。コミュニケーションだけでいうと、「微妙」という言葉だけでも、その時の表情などで通じる。だけど書き言葉ではそうはいかない。読み取るときも、文学作品等は細かいところまで意識していないと読み取れない。言葉の力を付けなければいけない。ことばの力を付けようと思ったら、たくさん読まないといけない。読書量もPISAの調査では最低である。朝読書をやっている学校が多いと思うが、しっかりやってほしい。

### 3 教育の不易

私の教育理念は我々の世界で生きていける力をきちんと身に付けさせること。例えば礼儀作法がそうであるように、小・中・高でやる勉強もそうである。今、世の中でやっていることは、勉強が分からないとやっていけない。国語の力がなければだめ。小・中・高までみんな行くようになったのだから、それを前提に世の中の仕組みが動いている。そういう意味での基礎学力もいるし、基本的な生活習慣もいるし、あるいはTPO、相手に合わせてものが言えるということもいる。

子どもたちが自分で仕事をもって食べていかなければいけない。パラサイトではだめ。自分の責任で、一人の市民、社会人として、世の中の形成、世の中の動きに対して責任を持つ。それを育てていくのが学校の昔からの使命である。だから言うべきことはちゃんと言わなければならない。みんな一人で生まれて、一人で死んでいく。命をもらったと言うのはそういうことである。一生をどう生きていくかを考えなければならない。

70になっても80になっても、毎日わくわくした人生でなかったらいけない。せつかくもらった命である。そのためには、若いときからの覚悟・準備がいる。そのためにはいろんな物語を読ませる。いろんな人生があり、一人一人が、自分のもらった命を生き切っていくということ。そのための準備を小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに、高校生は高校生なりに考えていく。これはキャリア教育につながっていく。キャリア教育は仕事をどうやっていくかではない。

### 4 授業づくり

目標分析表を作ること。今日配付した資料に目標分析表と目標構造図がある。これが、われわれが何十年やってきた授業作りのやり方。関心・意欲・態度も大事だし、思考力や追求・探求も大事だし、あるいは知識・理解・態度も大事。單元ごとに、こういう目標分析表を作り、本当に大切な知識・理解、関心・意欲・態度とは何だろうと書き出してみる。これを目標の洗い出しと言っている。そして、その中から大事な目標を見つけていく。15時間の中で、中心になるところ。15時間の中でこれが分かればいいと言っているところ。それは何だろう。これを中核目標といいます。中核目標を1つか、2つか、3つ見つける。他の目標を基礎目標というが、これを関連づける。こういう作業をする。そして目標分析表に出てこなかった前提目標。これを考える。それから発展目標。これが目標構造図である。それを1回授業で扱えばいいのではない。繰り返し、繰り返し、いろんな文脈の中で中核目標が扱われてくる。あるいは基礎目標が扱われてくる。そういうのが目標順路案。そうして単元指導計画を作る。この中で本時の指導のあり方を考える。そういうメリハリのある、目標を絞り込んだ授業作りをしていかなければいけない。ある指導法をやったからよくなるということはない。つまり、願いやねらいを明確にして、それをどう指導していくかが大切で、大きな文脈を考えず、指導法ばかりを考えてはいけない。